

## 晋代南部アジア瞥見

佐伯義明

後漢末、黃巾の賊の叛亂にて天下大いに擾れしが、之に乗じて内群雄割據し、外邊境郡縣及諸屬國の分離獨立を見るに至れり。その中、南方に於

ては日南郡象林縣(今日の佛領安南の廣義)の功曹某の子區連なる者(思ふに土人)謀叛を計りて遂に象林縣を中心として林邑國を打立てたり。是れ唐の中頃迄の林邑國以後の古城國の基なり。扱て區氏の林邑は吳代末に於て區連の外孫范熊に奪はれ又熊の子范逸は晉代の中頃その奴范文に國をくつがへされたり。

この林邑の第二范王朝の始祖范文(在位東晉成帝咸康二年—穆帝永和五年即西紀三三六—三四九)が傑物なるはその奴隸てふ出身にても知らるゝな

るが、更に范文の事蹟として次の注意すべき記事  
晉書林邑傳にあり。即ち

及逸死無嗣、文遂自立爲王、……於是乃攻大岐界・小岐界・式僕・徐狼・屈都乾・魯扶・單等諸國并之、有衆四五萬人。

とあるはこれなり。而して此事件の確たる年代は不明なるも、前後の關係上范文の即位後間もなき頃の事たるは信憑して殆んど誤なかるべし。即ち范文は林邑篡奪に乗じてその餘威を振ひ此等近隣諸國を併吞せしなり。

扱て然らば文が攻めしてふ此等の國々とは現今の何れの地方なるか。此等の國々の位置判明せば晋代林邑人の地理的知識の範圍も鮮明し併せて當

時の南部アシアの形勢も分明せん。而して此等の國或は地方は范文が征服し併せしものにして林邑の近鄰たる疑なき故、今此の考を基礎として此等諸國の位置を考定するなるが便宜上最後の罽國より説かん……百萬分東亞輿地圖參照(安南方面の部)單

罽國は音韻上より考ふるに後漢書の罽、國、通典の罽、國ならん。今後漢書本記より罽國に關する記事を拾ふに次の如し。

卷四和帝紀

永元九年春正月永昌徼外蠻夷及罽國重譯

奉貢揮音擅、東觀記作擅、俗本以禪字相類或作禪者誤也、說文曰譯所以傳四夷之語也

卷五安帝 永寧元年十二月永昌徼外罽國遣使貢獻揮音

紀第五 永寧元年十二月永昌徼外罽國遣使貢獻揮音

卷六順帝紀 永建六年十二月日南徼外葉調國罽國遣使貢獻葉調國王使師會詣闕貢獻、以師會爲漢歸義使貢獻葉調邑君、賜其君紫綬、及罽國王雍由亦賜金印紫綬、

揮音 (葉調國につきては史學雜誌三十八篇第七號藤田博士の論文「葉調、斯調、私訶條につきて」を見るべし。)

此の本紀と同事實を誌して後漢書西南夷傳哀牢條に云へり。

和帝：九年徼外蠻及罽國王雍由調揮音擅、東遣重譯、奉國珍寶、和帝給金印紫綬

安：永寧元年罽國王雍由復遣詣闕朝賀、獻樂及幻人、能變化吐火、自支解、易牛馬頭、又善跳丸數乃至千、

自言我海西人、海西即大秦也、罽國西南通大秦、明年元會安帝作樂於庭、封雍由調爲漢大都尉、賜印綬、金銀、

綵繪各有差也杜氏通典卷一百八十七邊防第三南蠻上罽國條は此の後漢書西南夷傳罽國條をそのまゝとりに少し略せしにすぎず。又罽國王を本紀註は雍由とせるもこの西南夷傳の雍由調の方正しかるべし。扱又通典が後漢書西南夷傳をそのまゝとせりせば通典の罽國は即後漢書罽國なる疑なし。

揮・揮及び前掲後漢書注の東觀記の擅により知らるゝ如く此等は皆同一音を寫せる音通字ならん

さて後漢書によれば罽國は永昌徼外とあり或は日南徼外とあれば永昌郡或は日南郡をへて支那に

朝貢せるなり。即ち西方永昌郡或は南方日南郡より朝貢せるなるが、南方は海路により西方は陸路

によりしなり。何となれば後漢時代の永昌郡は現今の雲南省騰越道永昌縣にて海に全然關係なく日

南郡は今の安南順化附近にて海に濱するてふ兩郡

の位置之を證すればなり。而して後漢書本紀に見

ゆる擲國記事三條の中、獨立にその位置を誌せる

二條は共に皆永昌徼外として永昌郡を基としてそ

の位置を説けるにより、今永昌郡の位置を主とし

て考ふるに、音韻上の事も併考して、擲國は蓋し今

日の英領緬甸の南北 Shan states 即ちサルウイン河

上流地方ならん。此河は支那の所謂怒江、潞江に

て此地方を現代支那地圖に北擲・東擲・南擲など、

稱し又シヤム北部をも擲部と稱せば、此等の地方

を擲國と後漢時代に稱せしならん。通典の擲國が

此と同一地方を指せるは、それが後漢書西南夷傳によ

れること明かなれば、何等の疑なし。愚生は音韻上

方向上後漢書の擲國即通典の擲國を現今の擲地方

とし、更に晉代の單國を之と同一視せん。即ち林邑

王范文の征伐せし單國とは今日の擲地方の一部分  
なり。

魯扶

單國が今日の擲地方に比定せられたりとせば魯

扶國は何れの地方なるか。愚考するに魯扶は音韻

上蓋し今日の佛領老撾北部の琅勃刺邦 (Luang Prabang)

市を中心とせる同名の地方を指せるに非る

か。愚生はしか信ずるなり。

屈都乾

藤田博士は藝文第五年第十號の「前漢に於ける西南海上

交通の記録」なる論文中、前漢書地理志に見ゆる

都元國を説明され、

「都昆・都軍は(即都元)名稱の上からも位置の上から

も屈都昆・屈都乾の省稱であるやうに見ゆる。そしてそ

の方位及びその疏黃を産するといふことからスマトラ

島の東北岸上にある國若くば港であらうと思はれる。」

47頁。

「唐時の羯荼即ち宋元の吉陀はスマトラ島の北岸に在つたことは略ほ疑がないとすれば羯荼・吉陀は屈都毘・

屈都乾の屈都の異譯ではなからうか。余はしか信ずるのである。ゲリニ氏は九德ミせるは誤れり云々。」48頁

と云はれたるも、博士が都元國を今日のスマトラ島東北岸の *Pai* 近傍に比定せられしは賛成しうるも、之を屈都乾に結ばれしは如何。愚生は屈都乾は猶林邑に近かりし國と見んとするなり。今水經注卷卅六温水條を見るにその朱吾縣の事を誌せる注に

晉書地道記曰、朱吾縣屬日南郡、去郡二百里、此縣民漢時不堪二千石長吏調求、引屈都乾爲國、林邑記曰屈都夷也

とあり。之によれば屈都乾即屈都夷は朱吾縣に近かりし様にて藤田博士がスマトラ島の都元國と同視せらるゝには全く賛成しえず。愚生は朱吾縣の位置(安南の廣南の南のトービン町)より今日の

佛領老撾南部サラヴァン市の東方コンツィ地方を晉書地道記の屈都乾とし、従つて之を更に林邑傳の屈都乾と認むるなり。

徐狼

水經注温水條に林邑の境域を説きて、注に、東濱滄海、西際徐狼、南接扶南、北連九德と云へり。滄海は漲海即南支那海を指し、九德は九德郡にて(宋書地理志治浦陽)今日の安南ヱイン(文墨)に當り、扶南は云ふ迄もなく今の東蒲寨なり。この林邑の四至は水經注の直ぐ前文により明かなる如くその都典沖即ち漢以後の日南郡象林縣即ち今日の安南廣義を中心として説けるなるが、此に西際徐狼として徐狼なる名見えたり。又同書同水條注に林邑の都典沖を流るゝ淮の事を誌して、其水又東南流、逕船官口、船官川源徐狼と見えたり。淮、船官川等を今日の何々川と確實には比定しえざるも、徐狼が林邑の都典沖(今日の安南廣義)の西な

ることよりして、音韻の事も併考して、ラオス南部ジャライ地方を水經注の徐狼と同一とし、更に水經注の徐狼を晉書の徐狼とみとめん。

式僕

僕は愚考するに濮と同一に非るか。杜氏通典南蠻上卷一百八十七邊防第三に所謂諸々の濮國見えたり。その中に黒製濮あり。

黒製濮在永昌西南、山居、耐勤苦、其衣服婦人以一幅布爲裙、或以貫頭、丈夫以穀皮爲衣、其境白蹄牛・犀・象・琥珀・金・桐華布、又諸濮之域皆出楛矢、爾雅曰、南至於濮鉛、周書王會卜人丹砂注云卜人西南之蠻、丹砂所出、今按卜人蓋濮人也。按諸濮與哀牢地相接、故附之。穀皮は不明なるも、我國のみの如き類

か。桐華布については後漢書西南夷傳哀牢條に「有楛桐木、華績以爲布、幅廣五尺、潔白不受垢汙、先以覆亡人、然後服之」あるを参考さすべし。この註に廣志曰楛桐有白者、剽國有桐木、其華有白蠶、浣漬緝織以爲布也。晉の郭義恭の廣志を引けるが、中に剽國とあるは唐代シャム方面にあらはれし驃國なるべし。之により驃國が唐より以前既に晉代に存せし事證せらるなり。(箭内博士 證史地圖唐代の部參看)

黒製濮などの濮人或は卜人は永昌の西南即ち今日の雲南省の西南地方に居りしにて附近の人種より考ふるに又印度支那民族ならん。H. H. H. 氏の Resarches on Polany's geography の三六七—三六九頁に卜人の記載あり。愚生は黒製濮の黒は色を表す故省略しえて製濮Ⅱ式僕ならんと思惟す。製又人種名にて後漢書郡國志などに見え今尙雲南四川に在りと云はる。故に製或は濮の音を傳へて式僕とせしならん。必竟黒製濮は製と濮の混血にてそれを音寫せるが式僕ならん。故に式僕と晉書にあるは製濮と同一にて即ち雲南の西南の一地方に求めらるべし。

大岐界小岐界

此の兩者につきては全く考へえず。扱て以上にて范文が攻略せし國々が大体今日の何れの地方なるかを考定せるが、これによれば晉代の林邑人の地理的知識は案外に廣く安南山脈の彼方に及び、

更に西、ビルマ地方に及びし事知らるゝなるが、かく范文にたやすく征服されしより考ふれば（多分一時的ならんも）此等の諸國は未だ國家的成立をなさず此處、彼處に分散せる村落的集團の一塊にすぎざりし事想像さるべし。而して此等の地方が明にか支那正史にあらはれしは支那邊境の他地方に比し甚だ遅く、やうやく隋唐以後墮和羅などが知られしが始めなり。之を以て考ふるに既に晉代に一林邑國王にすぎざる范文が、かゝる地方迄攻略せしは甚だ偉とすべきなり。（昭和三年六月十一日）